

なぜ、この人は僕を信じてくれるの だろう？

小豆畑丈夫(小豆畑病院病院長/日本大学医学部救急医学)

この書を10年以上ぶりに病院の壁から下ろした。写真撮影のためである。額を外してみると、自分の字で書かれた裏書きを見つけた。

初診：平成15年1月28日

手術：平成15年4月25日

永眠：平成18年3月13日15時28分

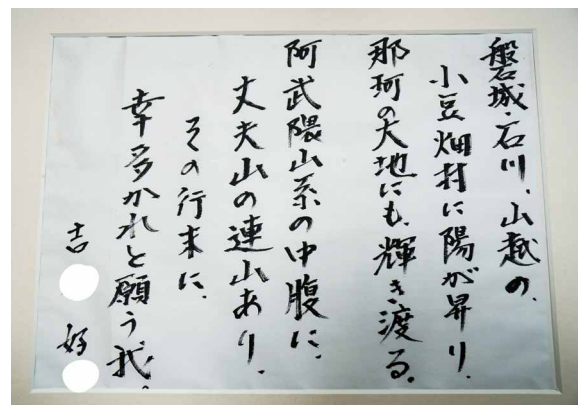
私は平成7年大学卒業なので、医師になって8年目、米国でのがん遺伝子研究を終えてまもなくの時期に進行胃がんに対する胃全摘術を執刀した。大学勤務であった私は、医局の大先輩に前立ちをして頂いて実家の病院で手術を行った。胃のがんは手術で取り切れたが、総肝動脈周囲にリンパ節転移を認めたためTS-1による補助化学療法を実施した。毎週一度、東京の大学から茨城の小豆畑病院に通い化学療法を行った。

しばらくは再発兆候もみられず、70歳台であった患者さんは元気に軽トラで私の外来に通い、いつも「先生のお陰で命拾いしたよ」と笑顔を見せてくれた。そのとき私はこの書を頂いた。磐城石川とは小豆畑病院を創った私の父の出身地である。那珂とは小豆畑病院の所在地・茨城県那珂市である。

しかし、やはり肝門部のリンパ節が大きくなり黄疸が出現した。私はその頃、広く行われていた5FU＋シスプラチン治療を入院で行った。この方は副作用の口内炎にひどく悩まされた。口が痛くてしょうがないはずなのに、私が週一回来院するまで我慢されていた。他の先生には泣き言1つ言わない。ずっと私が来院するまで待っていてくれた。「なぜ、この人はこんな若造に自分の命を任せるのだろう？ なぜ、そこまで人を信じられるのだろう？」。そんな思いで医師の背負う責任の重さに心が震えた。

患者さんは化学療法の甲斐なく小豆畑病院で亡くなった。亡くなった日、私は大学勤務で最期の時に立ち会うことができず、2日後にご自宅にお邪魔して、おうちの寝室に横になられた患者さんに再会した。私は図らずも号泣した。医者が患者さんの死に動揺してはいけないと自分に言い聞かせたが、まったく効果がなかった。最後まで私を信じてくれた人を失った悲しさと自分の無力さが涙になった。

それ以来、私はこの書を自分の部屋に掲げている。「医師は患者さんに育てられる」、それを忘れないためである。



(No.4941, 2019.1.5)